

# 体育理論の実施状況と実施内容に関する考察

## A Consideration on Implemental Status and Implemental Contents of Theory of Physical Education

村瀬 浩 二  
Koji MURASE  
(和歌山大学教育学部准教授)

流 川 鎌 語  
Kengo NAGAREKAWA  
(和歌山大学教育学部附属中学校教諭)

三 世 拓 也  
Takuya MISE  
(和歌山大学大学院教育学研究科)

2016年10月3日受理

### I 緒言

中学校保健体育における体育理論は、現行指導要領において、その各学年での具体的内容と各学年3単位時間を配当し、実施するよう明示された。平成10年学習指導要領(文部省, 1999)では、その名称も「体育に関する知識」であり、第1学年から3学年の「すべての生徒に履修させること」としているものの、具体的内容や時間数の明示はされていない。また、学習指導要領解説保健体育編(文部省, 1999)では、各運動領域との関連を図りながら、運動の実践とを関連させていくことを求めており、「体育に関する知識」は各種目に関する「理論編」との意味合いが強くなっていた。このような背景から、現行指導要領以前の学校現場ではほとんど「体育に関する知識」を単元では行っておらず、各種目のオリエンテーションや体づくり運動での理論編として取り扱われていたのが実態であった(坂, 2000; 沢田, 1997)。

現行学習指導要領(文部科学省, 2008)では「体育に関する知識」が「体育理論」に改正され、各学年の時間とその具体的内容が示されたこと、さらに学習指導要領解説保健体育編(文部科学省, 2008)では「単元として構成した」という文言を示し、単元としての実施を推奨された。これは、2006年のPISA(Programme for International Student Assessment)の結果を受けて、一定の学力の保証を求める方向に学習過程が改変されたことに由来している。特に、体育の学習内容のなかの「技能」、「態度」、「知識、思考・判断」のうち、「知識、思考・判断」を重視し、知識、思考・判断を充実させることにより、学校体育のなかのスポーツ実践場面や、生涯スポーツ場面における技能の活用へとつなげることをねらいとした。この方針は「新学習指導要領に基づく中学校・高等学校向け「体育理論」リーフレット(文部科学省, 2011)において、「する・見る・支える」をキーワードに具体的内容が示され、さらに「単元として取り上げましょう。」という文言として全国教育現場に伝達が行われている。これらの方針によって、体育理論に関する教材が研究され、単元とし

ての運用について実践がなされていくこととなった。

例えば、佐藤・友添(2011)はその著書の中で中学校、高等学校における教材を提示し、さらに単元構造図や授業の流れ、発問、ワークシートなど、かなり具体的な授業イメージを提案している。実際、この著書を元に体育理論を実践したという現場の声は多い。野田ら(2014)は、この佐藤・友添(2011)の内容を参考にし、中学3年生を対象とした体育理論単元において「スポーツ文化の享受」を教材に設定し、「わかる」と「できる」をつなぐことをねらいとした実践を報告している。この実践の中では調べ学習や発表、役割分担をしたグループワークによって、生徒がアクティブラーニングに従事できるよう設計されている。知識、思考・判断を中心とし、それらがスポーツ場面に活かされることを狙いとするのであれば、このように生徒が能動的に取り組む授業設計が必須となる。体育理論を実践するにあたって、この点は留意されるべきであろう。

しかし、山元ら(2015)は体育理論を受講した、または過去に受講してきた高校生や大学生の体育理論に対する学習意欲と学習内容に対する理解度は低く、内容の再構成の必要性があると報告している。また佐藤(2015)は現場での実践上の問題として、年間計画上は位置づけられているものの、中学校では実施していない学校があることや、内容の取り扱い方、評価等に苦慮している事例があることを報告している。

これらの報告は現行学習指導要領が中学校において全面実施され、すでに4年が経過している現在でも、全国中学校現場では実践上の問題を抱えていることを示唆している。そこで本研究では、1.中学校体育教師を対象に体育理論の実践状況を調査し、実施状況や実施内容を明らかにするとともに、2.体育理論によって身につけたい学力を、実践事例の提示によって考察することを目的とする。

### II 研究1

#### 1 方法

中学校現場における体育理論の実施状況に関する質

問紙を作成し、その実施状況や実施内容を調査・分析を行った。

### 1-1 調査方法

中学校保健体育科教員を対象とした質問紙による調査を実施した。調査内容は以下の通りである。

- ・教職歴(平均11.8年, SD=9.4)、年齢(平均35.7歳, SD=9.1)、性別(男性44名, 女性21名, 未記入4名)
- ・体育理論の実施状況(選択肢)、実施していない場合はその理由(選択肢、複数選択可)
- ・各学年の実施内容(自由記述)
- ・体育理論によって得られる学び(自由記述)
- ・体育理論を実施して困ること(選択肢、複数選択可)

### 1-2 調査対象

中学校保健体育科教員を対象に調査を実施した。北海道、東北、関東、近畿、九州各地域数名の中学校保健体育科教員に調査用紙を郵送し、知人の教員に配布・回収してもらうよう依頼した。調査用紙は205通配布し、67通の有効回答が得られた。回収率は32.7%であった。なお、複数選択項目を単純集計した場合のパーセンテージ表示における母数は、全て有効回答数67を分母としている。

## 2 結果および考察

### 2-1 実施状況について

実施状況の設問について単純集計を行ったところ、「単元として実施」31名(46.7%)、「体力テストと併せて実施」12名(17.9%)、「各種目のオリエンテーションとして実施」25名(37.3%)、「その他の形態」7名(10.4%)、「実施していない」8名(11.9%)であった。単元として実施していると回答した教員の割合が最も高く、次いで各種目のオリエンテーションとして実施であった。中学校保健体育授業において体育理論が実践される場合、この2形態のどちらかで行われている場合が大半を占めると考えて良いであろう。なお複数回答可のため、合計が100%を超えている(図1)。

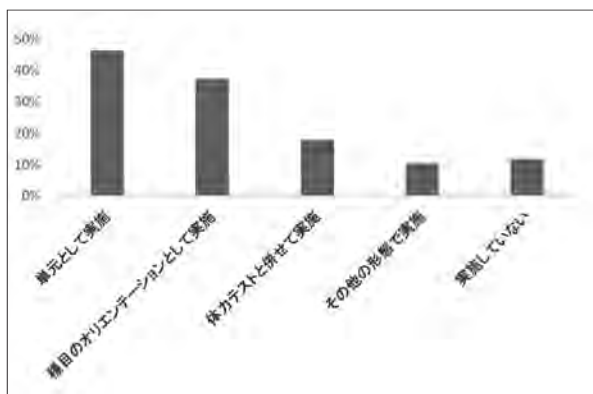


図1. 体育理論実施状況

この結果から回答者の半数近くが、単元として実施したとしている。また、実施時間数についても回答を

求めているが、単元として実施と回答した教員の平均は3.0時間であり、単元として実施している教師は、体育理論をほぼ学習指導要領に示されている時間数を実施している。これは、単元として実施している教師は学習指導要領が示す内容をよく理解しており、それに従っていると解釈できる。しかし、一方では単元以外で実施している教員は学習指導要領の意図を把握できておらず、依然として前指導要領の形式に則って行っていることが明らかになった。さらに、実施していないという解答が1割程度存在した。また、回収率が3割程度であったことを考慮すれば、実際の実施率は1～2割程度とも推察でき、中学校現場における体育理論実施率の低さを窺うことができる。

### 2-2 体育理論の目的・体育理論から得られる学びについて

体育理論の目的・体育理論から得られる学び(以下、体育理論の目的・学び)についての記述をKJ法によって分類し、単純集計を行った。その結果、最も多かった回答は「実技種目での技能向上」18名(26.9%)、次いで「生涯スポーツへのつながり」12名(17.9%)、「実技以外の視点から体育を学ぶ」11名(16.4%)、「スポーツ文化の理解」10名(14.9%)、「ルールやマナー・安全の理解」9名(13.4%)、「心身への効果」8名(11.9%)であった(図2)。

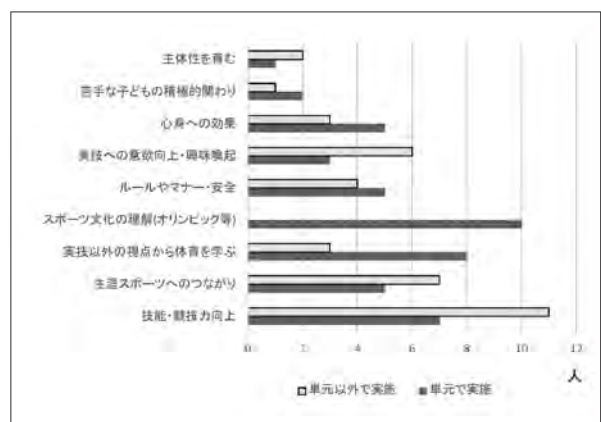


図2. 体育理論の目的・学びと実施形態

さらに体育理論の目的・学びと実施形態とでクロス集計を実施し、カイ二乗検定を行った結果、有意差( $p<0.05$ )が認められた(図2)。なかでも単元で実施している教員と実施していない教員の体育理論の目的・学びに関する差異は、スポーツ文化の理解(オリンピック等)にある。このスポーツ文化の理解(オリンピック等)は、学習指導要領において中学校1・2年生の一部と3年生の内容にあたる。体育理論を、実技種目の一部として取り入れている場合には、この内容に触れられないのであろう。実技種目の技能や意欲の向上、ルール・マナー・安全の理解のためであれば、種目の一部として行うことによってその効果は得られるであ

ろうし、実技種目と照らし合わせながら進められる利点もある。

一方で、スポーツ文化の理解という内容を実技種目の中に組み入れようとしても、子どもたちから見れば実技種目の内容とはかけ離れたものと感じることとなり、種目との関連性を感じず積極的な学びは起きないと考えられる。このような理由からスポーツ文化の理解については、単元として実施している体育理論の中でしか取り扱われてこなかったのであろう。

また、実技以外の視点から体育を学ぶという回答についても、単元として取り扱っている教師の方が多く回答する傾向にあった。この「実技以外の視点から」という回答には、「運動を実技としてだけでなく、別の視点から関われることを学べる」や、「見る、支えるという視点からの気づきが得られる」といった意見があった。これは、運動・スポーツに対して実技、つまり「する」だけでなく、「見る」や「支える」ことを学習内容として入れていることが、この回答の要素となっていると考えられる。「見る」や「支える」といった学習内容を実技種目単元の一部として取り扱うには、実技授業においてスポーツ教育モデル(シーデントップ, 2003)のような企画・運営などに生徒が積極的に参加する単元構成が必要となる。本結果は、このような単元構成を意識して、授業づくりをしている教員が少ないことを示唆している。

### 2-3 体育理論を行うにあたって困ったことについて

体育理論を行うにあたって困ったことという設問について単純集計を行った(図3)。その結果、最も多い回答が「時間がとりづらい」25名(37.3%)、次いで「内容が扱いづらい」16名(23.9%)、「教材が手元に無い」14名(20.9%)、「運動することが重要」10名(14.9%)、「子どもの反応が良くない」6名(9.0%)であった。

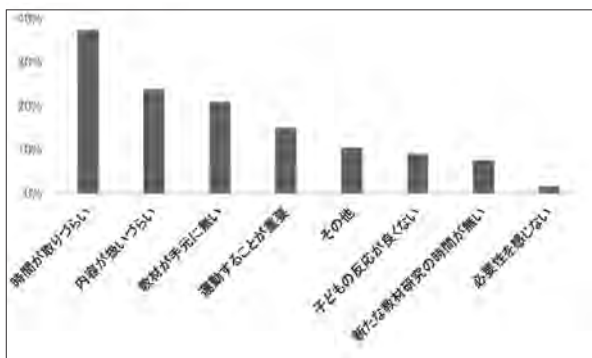


図3. 体育理論実施にあたって困ったこと

現行学習指導要領では武道とダンスが必修化され、どの種目についても十分な時間がとりづらくなっているのが現状である。その点が、実施時間を取りづらいという回答として反映されていると解釈できる。また、内容が扱いづらい、教材が手元に無いといった回答や、運動することが重要、子どもの反応が良くない

といった回答は、体育教員の体育理論実施に対する問題点を浮き彫りにすることができる。特に、スポーツ文化の理解を実施する場合、子どもは、自分の「する」スポーツとはかけ離れた内容に見える。そのため、教員が教材研究を十分に行っていない場合、子どもたちの興味は喚起されづらいであろう。そのような教員の教材研究の不足が、この結果に反映されていると推察できる。

### 3 まとめ

質問紙調査の結果から、体育理論の実施状況が明らかになった。体育理論を単元として実施している教員は、多くとも半数以下であり、回収率から推察すれば2割以下であることも推察できる。また、この実施率の低さは、教材の扱いづらさ、生徒達の反応の悪さに起因していると考えられる。

特に、実施している教員の中でも単元で実施した教員と、単元非実施の教員との意識の違いは大きい。その違いは、「スポーツ文化の理解」に対して大きく現れ、単元で実施する教員しかこの内容を扱っていないと言える。また実施している教員から、「苦手な子どもが中心となって授業に参加できる」という意見が複数得られた。ここにも、体育理論を単元として実施する意義が存在する。生涯スポーツを考えれば、中学校、高等学校での体育は、苦手な生徒にとって苦痛が多くなり、積極的に参加できる時間が減少する。単元で実施する体育理論の授業では、そのような苦手な生徒がリーダーシップを取り、運動が得意な生徒達の意見をまとめる姿も見られるという。このような機会は、運動が苦手な生徒達にとってスポーツに関わる場面にポジティブに接することのできる貴重な機会となるだろう。

## III 研究2

### 1 目的

中学校での実践事例から、体育理論が子どもたちの学力として育むべき要素を考察する。

### 2 実践事例

以下は中学校3年生を対象とした5時間単元のなかの、3時間目にあたる授業の事例である。単元テーマは「文化としてのスポーツの意義」であった。実践対象とした学校では、当該県がこの年の国体開催県であったことから、3年次「スポーツ文化の理解」の内容を、〇〇国体との関わりとして授業を実践した。

実践事例 単元名「体育理論」 本時(第3時) 自分たちにあったスポーツの関わりを見つけよう

#### 2-1 前時までの流れ

2-1-1 第1時「スポーツの魅力」について、多面的な視点でアイデアを発想する。



2-1-2 第2時「国体によって何が起こったか？」についてブレインストーミング等で考えを巡らせ、それらをグルーピングしながらそれぞれの繋がりに気づく。

この第2時では、自県で開催された国体について起きたことを挙げているが、「道路が通った。」「人がたくさん来た。」など、生徒自身の居住地域に起きた出来事としての認識はあるものの、自身とは関係のないものとして捉えている傾向があった。

## 2-2 本時の学習

授業のねらい(本時)

「国体はどれだけの人にスポーツの機会を提供したか？」をテーマに、スポーツへの様々な関わり方について考えさせたい。また、スポーツとの繋がりが、人や社会との繋がりに結びつくことにも気づかせたい。

授業の流れ

### ①前時の振り返り

前時に生徒らがまとめた「経済」、「開発」、「人の流れ」などの内容について振り返る。

### ②自身の国体との関わり

国体との関わりについて、自分に関することをワークシートに記入し、お互いの記入した内容を見合う。その際、教師は全校でフェンシングの試合を見に行ったことを例示し、生徒自身が関わったことに注目させる。また、それを始点に自分の周りのことを想起するよう促す。

### ③記入した内容の発表

数名の生徒が指名され、フェンシングや水泳など観戦したことや補助員をしたことなどを発表した。

### ④自分以外の人の国体との関わり

自身の周囲の人と国体との関わりを、生徒はワークシートに記入した。教師は、他のグループとは違う、オリジナルな内容を記入するよう求めた。これらを各グループがまとめ、発表の準備をした。

### ⑤まとめた内容の発表

周囲の人のボランティアとしての参加、開会式・閉会式への参加、監督やコーチとして参加したことなどが発表された。また、代表チームが学校の体育館を使った練習を参考に、生徒が自身の部活動を工夫した例を挙げるなど、様々な関わり方について認識が広がった。

### ⑥自分のスポーツの接し方について、人生計画をする

自分自身の生涯スポーツの関わり方を、生徒がワークシートに記入する。

### ⑦記入した内容の発表

前時において同様の表を記入しているが、それとの変化を教師が発問し、変化していることを意識させた。その上で指名された生徒が、自身の記入した内容を発表した。ボランティアなど選手を支える形での関わりや、自分の家族を通じた関わりなどの発言

が見られた。

### ⑧振り返り

本時の振り返りを記入した。

## 3 総合考察

この実践は、国体と自身の関わりから周囲の人との関わりへと広げるなかで、様々なスポーツの関わり方への気づきから、生涯スポーツへの参加について意識変化を促したと言えよう。ここまでの3時間において、単元当初、生徒達は自分の居住する地域で行われた国体が、自身のスポーツライフとは関わりが無いと認識していたが、時間の経過につれ自身と国体で起きた事象とを繋げる思考が生まれている。この数時間の単元で、自身のスポーツライフをイメージすることは、生涯においてとても貴重な経験となるであろう。スポーツ嫌いの生徒が、学校体育を終えた後、積極的なスポーツ参加をすることは難しい。そのような生徒達の将来のスポーツライフが、今回の授業でイメージしたことにより、「する」スポーツ参加だけでなく「見る」や「支える」といった方向に広がることを期待できる。

また、今回の授業は21世紀型能力の育成という側面から捉えることができる。この授業は、将来の生涯スポーツとしての社会参加を、自身の周囲で起きた出来事を元に仲間と協力して創造するという思考形態を辿っている。この思考形態は、将来のスポーツ場面をイメージするだけでなく、身近な周囲の事柄の意味を捉え直し、自身の将来へと置き換えるという思考力の育成であり、さらに、グループ討議を行い社会参画の可能性を創造することにより実践力を高めることにつながる。つまり、創造的思考や多面的思考の育成となる。また、この青年期は思考の発達段階において、ものや事柄の名前を一対一で記憶する機械的記憶の段階から、いくつかの事柄を関連づけて記憶するエピソード記憶へと移行する時期でもある。体育理論のなかで、身近な事柄と国体、さらには自身の将来像まで繋げて考えることは、エピソード記憶の発達を促進することにもなり、思考力を重視する21世紀型学力の育成に合致する。

体育理論は、多くの生徒に学校体育と生涯スポーツをつなぐ架け橋を与えることとなる。運動が得意な生徒達は「する」スポーツとして、生涯スポーツに関わることもできる。しかし、運動が苦手と感じている生徒は学校体育の終了とともに、スポーツに関わる機会を無くしてしまう。そこで、自身がスポーツについて積極的に関わる経験を持てること、「見る」「支える」といったスポーツへの関わり方をこの時期に理解すること、自身もスポーツに関わる可能性を認識しておくことが運動嫌いな子どもたちを生涯スポーツへと導く方法となるであろう。

一方、中学校現場の体育理論実施状況の現状から見

ると、単元実施(46%)より運動技能の習得やルール理解(合計66%)といった体育理論の実施形態が多い。これは、体育授業の現場で「する」スポーツを重視していることを示唆している。「見る」「支える」の部分は実技の中でも体験でき、理論として行う必要性を感じないということが、現場の本音としてあるのかもしれない。また、体育理論を実施するとすると、運動が好きな生徒が多く、体育理論を行うことに対して大きな抵抗が生まれることは想像できる。しかし、発達段階を考慮しても、中学校では運動に苦手意識が生まれる生徒がいることは避けられない。そのような生徒達のために、スポーツの様々な捉え方、自身の参加の仕方の幅を広げることで生涯スポーツへと繋げる必要があるだろう。現場教師の回答や、実践している教師へのインタビューから、中学校1年次の多様な関わり方や中学校3年次のスポーツ文化に関する単元を実施することにより、授業内でリーダーシップを取る子どもたちに変化が見られるという。それは、主に女子生徒のなかで、通常の実技授業において運動に苦手意識を持つ子どもが、このようなスポーツ文化や多様な関わり方の単元では、グループワークなどで積極的にリーダーシップを取り、話し合いを進める姿である。一方で、特に男子に多く見られる姿として、通常スポーツを得意とする子どもたちは話し合いにあまり積極的に参加できないが、彼女たちのリーダーシップに導かれ、徐々に自身の周囲の出来事と将来のスポーツライフを結びつけることができる。通常の実技授業で見られる役割が、体育理論のなかでは一変するのである。年に3時間程度であれば、運動の苦手な生徒達がリーダーシップを取る授業があっても良いのではないか。短期的に見れば、体育理論での体育学習環境の変化が、実技の体育授業に対して何らかの変化をもたらすことも予想できる。例えば、体育授業の場面において、運営や応援といった面に積極的に関与するなどである。このことを促進するには、シーデントップ(2003)が提唱したスポーツ教育モデルに則った授業展開を、体育理論の

後に展開することが、子どもたちが理論と実践を体感的に学習できる方策となる。

このように、子どもたちが体育理論に意義を認めて受講することで、思考力を育成し、生涯スポーツへと繋がる態度を育成できるであろう。そのために教師は、生徒に体育理論単元の意義を感じさせる授業を行わなければならない。したがって、体育理論を単元でアクティブラーニングとして行うことは必須となる。さらに教師の十分な教材研究と将来に生涯スポーツへと繋がるという信念が必要となる。

#### 文献

- 坂比呂志(2000) 中学校における体育に関する知識(野外スポーツの行い方)の指導に関する研究:玄倉川の悲劇から学ぶ,学習プログラムの作成. 日本体育学会大会号, (51), 467.
- ダリル・シーデントップ(2003) 新しい体育授業の創造—スポーツ教育の実践モデル, 大修館書店, 東京.
- 文部省(1999) 中学校学習指導要領解説書保健体育編.
- 文部省(1999) 中学校学習指導要領.
- 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領.
- 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領解説書保健体育編.
- 文部科学省(2011) 新学習指導要領に基づく中学校・高等学校向け「体づくり運動」「体育理論」リーフレット. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/jyujitsu/1306082.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1306082.htm)(最終アクセス日2016/08/03)
- 野田義勝, 堤公一, 福本敏雄(2014) 中学校における体育理論の授業づくりに関する一考察:中学校3年保健体育科「体育理論」の授業を通して. 佐賀大学教育実践研究, (30), 173-181.
- 沢田和明(1997) 「体育に関する知識」の学習指導に関する基礎的研究:多様な関わりからみた教科体育論の展開の可能性. 日本体育学会大会号, (48), 614.
- 佐藤豊・友添秀則(2011) 楽しい体育理論の授業をつくろう. 大修館書店, 東京.
- 佐藤豊(2015) 体育理論領域. 体育科教育学研究, 31(1), 72.
- 山元秀太・坂本一真・蓑田修治・山田禎郎・則元志郎(2015) 体育理論領域における課題の検討. 熊本大学教育学部紀要, (64), 247-2